

自然配植技術協会

ニュースレター

発行日 平成15年5月9日(第2号)

自然配植技術協会 〒603-8145 京都市北区小山堀池町 28-5

TEL/FAX 075-254-6014 E-mail shizenhaisyoku@pep.ne.jp

名物と職人

自然配植技術協会 技術委員長

中静 透(総合地球環境学研究所 教授)

現代、地方を旅行しても大きな都市の駅前風景はどこも似ていて特色がない。駅ビルの土産物屋にはどこでも似たようなものばかり売っている。このことは、生物多様性の消失と深いつながりがあるのではないだろうか。

かつては、地方の名産・名物というものがあつた。食べ物に限らず、道具や玩具、建物までそれぞれの地方に独特のものがあり、それが旅の楽しみでもあつた。食べ物はもちろん、道具、玩具、建物なども生物材料をたくさん用いている。独特の産物には独特の生物材料が使われる。ちまきを包む葉は地方によっていろいろな植物が使われている。道具ごとに適した木材が違うし、建物も木材によって使われる部位が異なっている。床の間には、それこそ多様な樹木が使われている。そうした地方独特の産物(名物)がなくなることは、材料となる生物資源の必要性がなくなることも意味する。このような生物材料の多くは、もともとその地方に多かったか、あるいは利用のための

資源管理がなされてきたはずである。それを失うことにより、地方独特の森林・植生や土地利用が失われる、あるいは管理が放棄される。

また、生物材料を用いて製品を作る職人たちも生活の糧を失う。最近、伝統工芸を復活しようにも、その材料となる資源や道具がないらしい。和蠟燭の蠟はとれないし、こけしの材料となる良いミズキも少なくなっていると聞く。また、工芸職人だけでなく、生物材料を生産する農家や林家も、その生産に関する特殊な技術を失っている。かつては、地元的环境条件をよく知っている人たちがたくさんいて、それぞれの種類の生育に適した場所に作物や樹木を植え、それぞれに適切な管理をする技術があつたが、いつのまにか同じ作物、同じ樹木が日本全国に植えられてしまった。その結果、日本の生物多様性(とくに里山の)は危機に瀕している。

私たちは栽培「科学」の進歩を過信しているのではないか、と思う。育種や発達した管理技術、

化学薬品などによって適地でない場所でも育てることができ、効率的な生産ができる、と信じすぎてしまったのではないか。一方で、マツは枯れ、スギも幹を食われ、ヒノキは病気に罹っている。それらの多くは適地を外れた場所への植栽や、あまりに単一の種を広い面積で植えることによって被害が大きくなっている場合もあるだろう。いわゆる「科学」技術では、これらの問題はまだ解決できていない。

生物現象は、いわゆるカオス的メカニズムをたくさん含み、わずかな条件の違いによって結果に大きな違いを生む。天気の変化もカオス的といわれ、同じような気象条件でも明日の天気予報は8割しかあたらない。生物現象は場合によってもっと予測性が低い場合もあると思う。科学的なデータを積み重ねても、その予測には限界がある。し

かし、熟練した農家や林家（職人）は、そうした被害を避け、短期的な効率化ではなく、長期の利益を最大化するすべを体得していたのではないか。科学的データが彼らの経験に追いついていないだけなのではないだろうか？

だから、里山の生物多様性保全のためには、職人を育てること、名物を作ることが大切なのではないか、と思っている。どこでも同じ里山を作るのではなく、できるだけその地域の特色のある里山、他とは違う里山にする、そこで生まれる生物材料をもとに、伝統の産物を復活し、名物をつくる。そのために必要な作物や森林の育て方を経験的に知る人たちを増やす。そんなやり方を考えれば、生物多様性はもっと守れるのではないか、と考えている。このことは、自然配植の考え方と同じではないでしょうか？

- - - - * - - - - * - - - - * - - - - * - - - - * - - - - * - - - - * - - - -

～現場技術報告～

地域性苗木の生産から始める自然配植の試み

（ ）苗木生産

自然配植技術協会会員

（株）東植 西原 義治

現在、長野県で建設中の東京電力（株）神流川発電所南相木ダムでは、ロックフィルダムの盛立て材料を採取する、土取り場跡地や残土処理場など、面積約 15ha あまりの緑地復元に際し、地域特性に合致する自生種を主体とした、複層林を形成するという方針で計画が進められています。

本地点は高標高(標高 1500m)であるとともに、特に地域環境・立地特性に見合った、多様な森林形成を目指すという観点から、設計に当っては「地域性の確保」を優先に考え、そのために使用

する苗に関しても、現地自生種の種子から発芽させた育成苗等を用いることを基本に、検討がされています。

この様な基本方針に基づき当社では、東京電力（株）南相木工事事務所より委託を受け、地域性苗木を確保するため、種子採取、苗木作成及び育苗管理等を行っております。

今回はこれまでの状況について、簡単に紹介させていただきます。

(1) 周辺分布樹種の調査および導入樹種の選定

対象地周辺の樹林調査と、分布状況や立地特性に応じた樹種構成の傾向等の整理をしました。

文献および聞き取り調査により、分布樹種の将来樹高、出現遷移型、自・他形性区分、苗木の流通性に関するデータを収集・整理しました。

植栽対象地の立地環境特性に関するデータを収集・整理しました。

上記結果から植栽対象地の立地特性に適した群集を想定し、それぞれの樹木が役割を持つ様に樹種を選定します。

主な導入予定の地域性苗の種類

| 分類 | 種類数 |
|---------|-----|
| ブナ科 | 2 |
| カバノキ科 | 6 |
| カエデ科 | 16 |
| サクラ等バラ科 | 3 |
| ニレ科 | 3 |
| クルミ科 | 2 |
| その他中高木 | 15 |
| 低木類 | 9 |

(2) 種子・山取り苗の採取および播種・育苗

種子採取は植生分布調査結果に基づき、平成13年～14年にかけて実施し、主としてナラ類、カエデ類、カンバ類、サクラ類、シデ類、ウツギ類、グミ類等の種子を採取しています。

発芽床およびポットに用いる土壌は、各種子の適応土壌型（浄菌、発酵、合成）に応じて用土配

合を変え、合成～発酵型土壌を好む樹種には赤玉土主体の配合、浄菌型土壌を好む樹種には鹿沼土主体の配合を適用しております。

種子からの育成苗のほか、山取り苗採取も行っており、主に工事用道路脇など、周辺自然環境への影響の小さい箇所を対象とし、種子からの育苗に長期を要する樹種を中心に、実生（1～2年生）を採取しました。



写真 種子・山取り苗採取状況

当面は、苗木の所要本数確保と、植栽予定時期までの生長を図るため、育苗管理を続けていく予定です。



写真 地域性苗育苗状況

-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----

自然配植に関するQ&A(第2回)～自然配植における美 その2～

造園における美を掌る技

自然配植技術協会 技術委員

武田 純((有)ウッズプランニング 所長

京都造形芸術大学 講師)

「美しさ」・・・我々はどのような時に美しいと感じるのでしょうか？懐かしさや安心感を覚える時、感動や驚き、静けさ等、何か心に響く心地よさであり、様々な種類、形があるのではないかと思われます。

人類は「人」として歩き始めた時から、彫刻や絵画などの有形なものから、文学や音楽などの無形なものまで、様々な「美しさ」を求めてきました。博物館に納められている有史以前からの美術品や道具類は、その美しさが現代にも通じることを物語っています。

では、造園の世界はどうでしょうか。歴史の中で数々の文化に育まれ、地域・時代毎に庭園・造園の様式が生まれ、変遷してきました。エデン思想から始まる西洋庭園、永遠の生命を大地のエネルギー「気」に求めた東洋の庭園などが、さらに宗教、文化、風土に触れ、様々に変化し、日々の生活の中で「美しさ」を求め、芸術と言える段階まで紡ぎあげてきました。

わが国でも、万葉の時代から「池泉」「枯れ山水」「露地」等の庭園様式が生まれ、日本の自然の美しさや、思想・哲学をも織り込んだ文化として継承・発展し、寺院や史跡の庭園として今も目にすることが出来ます。しかし過去の遺産として保存された集落や古都の街並み・建築群落を除けば、現代の生活空間の中で、このような美しい空

間にめぐり合うことは、難しいかもしれません。我々は、何処でこのような素晴らしい文化を見失ってきたのでしょうか。

一般的に「日本庭園」として思い浮かべるのは、有名な寺院の庭園や大名庭園であり、そこは修行や権力者のための場です。確かに美しく感動を覚える空間ですが、生活の場ではなく、日々の安らぎは得られません。

日本庭園が観賞を目的に使われている事も問題のひとつです。本来、庭とは外部生活空間であり、使う為の場であるはずで、独断的に言わせてもらえれば、生活に余裕のある者が権力の象徴として余剰としての空間を造り、発展させてきたものが現代に伝わる「日本庭園」だとすれば、今の生活にそぐわないのは当然かもしれません。

しかし、長年人々を魅了してきた日本の庭園美は、こんなものではないと思います。日本の庭園文化が持つ技術というものは、ものの配置から組み合わせ、陰影の出し方から「間」の取り方まで、人の心地よさ・快適な空間を演習する技であり、千有余年の歴史を持つ庭園文化であり、多くの素晴らしい様式、伝統技法でありながら、現代の生活空間にも生き続けている文化・技術なのです。

ここで、日本の庭園文化が持つ技術を少し紹介してみましょう。

見え隠れ

全体を見せずに部分を見せることにより、見えない部分や全体を想像させたり、距離感を錯覚させ奥行きを感じさせる空間を作る。見せたい物への視線の途中で植栽などで「障り」を置き、全体を見せないようにしたり、池や道を曲げて向こうが見えないようにして「みてみたい」「行ってみたい」気持ちを誘う。

遮り

生垣や袖垣、門扉などで景の一部を隠してしまうこと。全体を想像させ、期待感を持たせる。

生けどり

見せたい風景を切り取って、視線を集中させ、景の広がりを感じさせる。窓や門などから庭を見せる時、その枠が額縁の役割を果たし、1枚の絵を見ているようにすることで、見せたい景色だけ切り取って見せる。また、見えない部分を連想させる効果もある。

隅掛け

斜線を使って新しいバランスを作り出し、視線を集める。例えば、蹲踞に置かれた柄杓、竹を斜めに組んだ垣根等、その場の安定した空間を崩し新しい安定感を作り出す。

反り

曲線を使い視線をひきつける。直線に力を加え、動的なバランスを生み出す。例えば池にかかる反り橋、光悦寺垣など。

天地人

自由な形をした三つの要素を緊張した関係にまとめることで、安定したバランスをつくりだす。3種類の石を三尊石組みの様に取り合わせたり、3種類の植物をバランスを考えて配置する。

借景

敷地外の風景を庭に取り入れる方法。遠くの山、隣の樹木などを自分の庭の1部として景色の広がりを作り上げる。

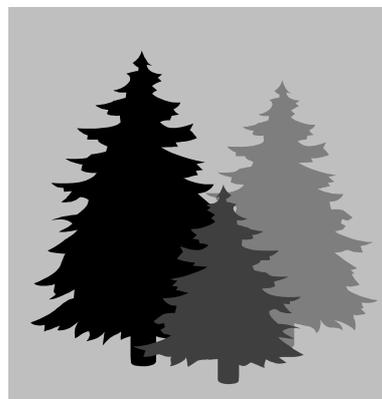
「間」をつくる

前述のいろいろな技術も集約すれば、「間」の技術といえる。物と物との間の「何もない空間」が創り出す絶妙なバランスを演出することにより、美しい景をつくりあげていく。

「何を」「何時」「誰が」「何の為に」「何処に」という目的意識をしっかりと持つ事は、計画時の常識でしょう。その場に何が必要なのか、計画の各段階で何度もフィードバックを行い目的を確認し、これらの技を用いれば、本来の日本庭園文化のもつ美しさに辿り着く筈なのです。個人庭園などの生活の場から公園緑地などの都市空間、これらを取り巻く里山などの空間など、あらゆる場面で応用できる技術ではないでしょうか。

さらに、日本人は昔から自然界のものを取り入れてきました。楚々とした野の花、風にそよぐ草、木々のざわめき、水の音...数え上げればきりがありません。

メリハリをつけ、広く深く見せ、快い空間を提供できるように受け継がれてきた日本の庭園文化が持つ技術、季節に敏感に反応する感性は「美しい空間」を創るのに欠かせない技であり、美を失った現代にこそ活用するべきではないでしょうか。



- - - - * - - - - * - - - - * - - - - * - - - - * - - - - * - - - -

自然配植の大きなうねり

自然配植技術協会会長 高田研一

私たちは、自然配植という言葉をつくり、その言葉の下に集まる自然配植技術協会という組織を立ち上げました。まだまだ少しずつですが、口コミで人が集まりだしています。

「会社」に働く人々が集まるのは、そこで利益（お金）を得よう、あるいは利益が得られるであろうという確からしい予測があるためなのですが、自然配植、あるいは協会に人が集まるのは、どうもお金のためではない、あるいは目先の利益を考えてのことではないという理由をもつ人々が増えているようです。

最初、自然配植技術協会は、法面への樹木導入法として、エコプランターという小型の分解性植栽基盤柵を用いて、苗木の植栽位置をランダムにかつ集中して植える技術を普及しようという「日本樹林パッチ協会」として出発しました。もちろん、そこに集まった企業はエコプランターを売り、特別な植栽法により差別化した緑化により、工事を確保しようとして、つまり、目の前の経済的利益を追求して集まったものでした。

それが、いつのまにか企業の姿が薄くなり、個人の顔が大きく見えてくるようになって来ました。それとともに、モノを売ることよりも、売るための基礎となる個人の資質の向上が目的の中心となってきました。それとともに、樹林パッチ工法と最初呼ばれていたものが、自然配植緑化へと姿、形を変え、適用分野も、法面での樹林化工法の枠にとどまらず、造園の分野、植木生産の分野、造林（林相改善）の分野、自然再生の分野へと広がっていきました。

今のように厳しい経済状況にあって、今々の利

益をさておいても、まずは個人の見識を優先させようなどという不思議な事態はどのように考えればよいのでしょうか。

このことの意味を私なりに整理してみることになります。

（１）環境と健康は、本来、市場経済の原理を優先させるになじまないものである。

市場経済の原理とは、カウントできる数量によって表現される稼ぎ高を最大にするように働きます。この稼ぎは、企業が成果を提供したその時点で得ることができますが、その成果が代価に対して相応の効果があるか否かは、その時点では見えにくいのがふつうです。特に、環境や健康の分野では、さまざまな要因が影響をもたらすため、その効果が分かってくるには長い時間を要することがたびたびです。

そこで、環境や健康の分野では売れる商品というのは、長い目で見れば、短期的に一定の効果がある、より安い商品と、長期的にみて大きな効果が認められる付加価値の高い商品の二極へと収れんしていくのが大きな流れです。

長期的にみて付加価値が高いとは、商品そのものの効果もさることながら、手を入れ続けることにより成果を高めていく「ケア」できることができるかどうかも含みます。つまり、売りっぱなしにならない商品が環境と健康の分野では評価されることが多いのです。

ライフコストやライフサイクルコストという概念がよく使われるようになってきたのは、社会

資本整備として、あまりにも無駄な投資がかつて多かったことへの反省からですが、モノの値打ちをめぐる考え方は少しずつ変化していくように思われます。

(2) 一極集中から多極分散、一様性から多様性へという軸の対立が見えてきた。

われわれの近代社会は、大量生産と大量消費によって支えられ、そのことが富の蓄積をもたらすと同時に、たとえば都会へ向かう一極集中の流れや日本中にスギが植えられるなどといった環境の一様性を生み出してきました。

地域の気候風土や歴史などの個別の条件を忘れ、克服することの中で、利益が得られる社会をつくってきたわけです。

ところが、気候風土を無視し、人間の都合に合わせて、一様性の高い環境をつくろうとすると、実はかなり高いコストが要求されることが分かってきました。適地適木という発想が昔からあったのですが、条件に合わないところで、無理に人の都合に合わせてようとすると、それを維持していくコストは莫大なものとなり、一方、あちらでもこちらでも同じものをつくることによって、作られたものの値打ちは、競争によって、多くが下がっていく現象が現れました。多くの競争敗者が生まれ、地方が疲弊していく元の原因をつくることになりました。

(3) 仕事の付加価値とは、現場では、モノに帰するものと人に帰するものがある、人に帰する部分の価値がこれまで正当に評価されてこなかった。

一人の人間には実に大きな力があります。どんな商品であっても元々は人が作り出したものですが、やがてその商品がひとり立ちをしていき、

人の姿が見えなくなります。

木を植えようとするとき、植木の価値、植木を植えるときの土や肥料などの材料の値打ちは明確に決まっていますが、いつの時期に、どのように根を整えながら、どういった組み合わせで、丁寧に植えつけていくかが、その木の将来の価値にとって大きな影響があります。

現場の作業者の一人の努力と工夫の積み重ねは、材料そのものの価値に劣らず重要な要素であることをあまりにも軽んじてきました。その結果、人の働きに対する正当な評価が行われず、経験に培われた知恵が育つことなく、現場では経済重視、技術軽視の風潮が強くなり、後継者となるべき若者が育たなくなりました。

(4) 自然配植とは技術の要素と哲学の要素の両方を含んでいる。

こういった社会の風潮の下で、自然配植は、日本の緑づくりの文化を、これまでの歴史的な伝統をきちんと評価、継承しながら、新しい水準へと発展させたいという願いから進んできました。

したがって、技術はきわめて重要ですが、それと同時に、人がどう生きるべきか、社会はどうあるべきかということを絶えず考えながら、地域地域の人々が、それぞれの個性や地域の気候風土、伝統を引き継ぎ、生かしながら、試行錯誤している段階にあるといえます。

(5) 「自然配植」や「自然配植技術協会」という言葉や組織は大切であって大切でない。

私は、自然配植という言葉がこの世から消えても、協会が倒れても何の問題もないと考えています。ただし、緑づくりに携わる人々が「生業」として、その努力と見識、技術に応じて、正当な報酬を受け、子どもたちを育てていく基盤をつくる

ことができること、すぐれた日本の自然が守られ、そこに美しい地域らしい緑が育つことが重要です。

自然配植は、やがては日本を越えて、世界へと伝えられる考え方、技術を有することができると思っています。そこでは、欧米的な競争的価値観ではなく、人と自然がどのように共生していくのかという考え方を含み、人が専門家として報われ

る「すみわけ」的価値観を実証する体系として発展していくことを期待しています。

これから、私たちは、自然配植の考え方、技術を、名もない多くの若者へと継いでいきたいと考えています。

-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----

～事務局より～

「現地交流会」開催のお知らせ

平成 15 年 5 月 30 日（金）岐阜県にて第 1 回自然配植技術協会の現地交流会を開催致します。

今回、行われます交流会は、「岐阜県環境新工法研究会」のご協力を得まして、合同研修会という形になりました。

岐阜県山林火災跡地や高富トンネルでの自然配植緑化の施工現場の見学、岐阜県立森林文化アカデミーでの屋内研修では、自然配植技術協会会員より自然配植緑化の事例発表（2 名）と技術討論会が行われます。

詳細については、別紙を参照ください。

参加申し込みは、平成 15 年 5 月 20 日（火）までに FAX または E-mail にてお願いいたします。多数の皆さまのご参加をお待ちしています。

第 3 回定時総会のお知らせ

平成 15 年 7 月 12 日（土）午後より第 3 回定時総会を予定しております。

会場は、京都市上京区の「ペアーレ京都」となります（地下鉄烏丸線今出川駅下車徒歩 6 分）。

総会后、引き続き講演会と場所を換えての懇親会を開催予定です。

詳細が決まりましたら、ご案内をあらためてお送りさせていただきます。

個人年会費見直しのお知らせ

平成 15 年度の個人会員入会金・年会費の見直しが去る 4 月 5 日に行われました理事会にて承認されました。正式には平成 15 年 7 月 12 日の総会の可決後に施行となりますが、個人会員入会金、年会費とも各 5,000 円となる予定です。

ニュースレター原稿募集

皆さまからの原稿を募集しています。全国各地の自然配植緑化の施工事例等、多くの情報を掲載したニュースレターにしていきたいと考えております。

また、こんなことを掲載して欲しいなどのご要望もございましたら、事務局までお寄せください。皆さまのご意見・ご感想をお待ちしています。

自然配植技術協会へのお問い合わせ、入会申し込みは下記まで

自然配植技術協会 事務局

〒603-8145 京都市北区小山堀池町 28-5

TEL/FAX 075-254-6014

E-mail shizenhaisyoku@pep.ne.jp